

云々。岡本慶雲の末森記にも、關八州の名城を即時に攻落し、奥州の仕置に出羽國まで利家・利長の御父子御越被成とあり。

○法船寺藥師堂

延寶六年五月撰述せし縁起に云ふ。當寺鎮守藥師佛は、昔利長卿越中國高岡に在城の頃、夢中に一人の僧來て、當國萩谷に埋れて、衆人の病惱を救はん便に思召され、給へと示現ある事數度に及べり。利長卿不審に思召され、頓て彼處へ至り、掘らせられしに、即ち藥師の座像一尺八寸の石像を掘出せり。利長卿甚奇異に思食、持佛堂を御建立有て安置し、萩谷の藥師と號し信仰し給ふ。然るに當寺開山念譽上人は、利長卿尾張國よりの御よしみの子細有るに依て、利長卿も御入魂淺からず。則彼藥師の尊像をば御附與有て、當寺の鎮守に安置し給ふ由記載せり。越中の萩谷といふ地は、射水郡守山の麓なるよし、別の縁起に見たり。按ずるに、右藥師佛は、片岡孫兵衛由緒書に、法船寺念譽上人幼少之頃、二代休庵へ母子共御預け置、利長卿御代法船寺へ被遣入院有之節、母儀正樹院殿へ藥師如來

御預、念譽上人へは光明佛御預被爲遊」と載せたる藥師佛と同佛なるべし。又縁起に云ふ。元和の頃、當寺門前に住居する者、大病に侵されけるに、六歳なる女子此藥師堂に來り、日々鬼灯一葉捧げて、父の病患を祈念し、一七日にて本復せり。是に依て病難の人々、鬼灯をば此佛前に獻備し、それを黒燒にして服するに、必ず功驗を得る事神の如し。とあり。故に今世人風邪などに侵され、咽疾甚敷難儀する時、必ず此藥師堂へ參詣し、鬼灯を備へ祈念して、その鬼灯をば黒燒になし服す。今は寺僧兼ねて黒燒になし、祈誓する人へ與ふるゆゑ、是を請け來り、全快の上鬼灯十二を報養に備ふるならはしとなれり。按ずるに、三壺記に、寛永八年四月十四日、犀川橋爪法船寺の門前町二軒の間より出火し、法船寺藥師堂に燃付き、夫れより客殿・庫裏に延燒す。と見られたれば、彼の元和の頃、門前に住みける者の女子、此の藥師堂に來り、鬼灯を日々備へて、父の病難を祈念すとあるは、舊寺地にての事なりけり。

○法船寺萬日講

三壺記に云ふ。寛永八年四月十四日、天氣能くから風吹き

て、世間もさわがしく思ふ處に、巳の刻に犀川橋爪法船寺の門前町家二軒の間に火をはさみ燒上りて、法船寺の藥師堂に燃付き、客殿・庫裏炎上して、河原町一面に燒廣がり、御城内までも延燒す。法船寺權譽上人は、前師は妙慶寺へ移り、其跡の住職にて、談義は北國第一の僧なりけり。兼ねて當寺を再建せんとて、材木共夥敷積置き、大工の隙を窺ひ有之處、悉く燒失し、難儀の上に、火本なればとて籠舎を命ぜられ、門前の者も吟味の處、我の人のと争ひに成り、二軒の家主も籠舎と成りしが、頓て火付露顯し、法船寺住職籠舎赦免、門前の火本は二人共追放せられ、法船寺は犀川の下にて河原を寺屋敷に賜はりたり。權譽上人は、暫く小屋懸の内にて、談義せられしが、頓て諸旦那寄進して大伽藍を建立せられ、追付き萬人講を立て、造營を補益せられたり。其の後出入座頭之坊宗壽といふもの發心し、晝夜念佛怠る事なし。宗壽は、泉野へ上りて小庵を結び、彼の念佛堂相續繁昌して自然と萬日講と成りて、延寶年中に萬日の回向として、江戸新智恩寺來駕有りて、國中一宗の智識此の回向に逢ひぬ。三十三年以後の萬日回向を發起せら

るゝこと、實に奇妙不思議といひつべし。されば兼ねて過分の材木共を寄せ置かれしかど、四月十四日の火災に悉く灰となし、下の河原に寺地を賜はり、追付き大伽藍造營せられけるもの、彌陀本願の有難さといひながら、權譽上人の智力による。善導大師の三尊を吹出されけるよりも、誠に此の上人の辯舌を以て大伽藍造立せらるゝ事、猶尊しと申して、諸人崇敬致しけり。とあり。

○萬日講傳話

咄隨筆に云ふ。享保十一年五月、金澤法船寺常念佛三萬日の回向に依つて、大坂阿彌陀寺の隱居等譽上人下向ありて、數十日說法あり。日本無双の說法者にて、群集する事夥し。紺紙金泥の六字名號を諸人に授けらるゝに、御影を水に移し頂戴するに、病氣悉く本復せり。また痛有る者は念佛を唱へて、名號にて撫づるに皆平癒せり。等譽上人此事を聞き、高座にて宣ふは、我が書きたる念佛にて病の癒ゆるには有るべからず。其人々の信仰の深きゆゑ也。只念佛許にて病は癒ゆべしとぞ。淨土宗四ヶ寺の一本山智恩寺は、源空の弟子、平重盛の孫師盛の子勢觀坊開山なり。中